

### 演習問題 2.19

固有ベクトルの方程式について、式 ( 2.45 ) が成立する実対称行列  $\Sigma$  は、固有値を係数とする固有ベクトルで展開した、式 ( 2.48 ) の形で書けることを示せ。同様に、逆行列  $\Sigma^{-1}$  は、式 ( 2.49 ) の形で表現できることを示せ。

#### 【 固有ベクトルの方程式 】

$$\Sigma \mathbf{u}_i = \lambda_i \mathbf{u}_i \quad \cdots ( 2.45 )$$

ここで、 $\Sigma$  は  $D \times D$  の共分散行列である。また、演習問題 2.18 より、 $\Sigma$  には対称であるものを選んでよいことが示されている。

#### 【 固有ベクトルの正規直交性 】

$\Sigma$  が実数の対称行列であるため、その固有値も実数となり、2 つの固有値が  $\lambda_i \neq \lambda_j$  であるとき、それに対応する固有ベクトル  $\mathbf{u}_i$  と  $\mathbf{u}_j$  は、

$$\mathbf{u}_i^T \mathbf{u}_j = I_{ij} \quad \cdots ( 2.46 )$$

となる。ただし、 $I_{ij}$  は単位行列の  $i, j$  要素で、

$$I_{ij} = \begin{cases} 1, & i = j \text{ のとき} \\ 0, & \text{それ以外の場合} \end{cases} \quad \cdots ( 2.47 )$$

を満たす。

#### 【 共分散行列 $\Sigma$ 】

$$\Sigma = \sum_{i=1}^D \lambda_i \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^T \quad \cdots ( 2.48 )$$

#### 【 共分散行列 $\Sigma$ の逆行列 $\Sigma^{-1}$ 】

$$\Sigma^{-1} = \sum_{i=1}^D \frac{1}{\lambda_i} \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^T \quad \cdots ( 2.49 )$$

#### 【 解 】

まず、式 ( 2.45 ) が成立する実対称行列  $\Sigma$  は、固有値を係数とする固有ベクトルで展開した、式 ( 2.48 ) の形で書けることを示す。式 ( 2.48 ) の右辺は、行列形式に直すことができ、

$$\Sigma = \sum_{i=1}^D \lambda_i \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^T = \mathbf{U} \Lambda \mathbf{U}^T = \mathbf{M} \quad \cdots ※$$

と書き直せ、これを  $\mathbf{M}$  とおく。ただし、 $\mathbf{U}$  は、固有ベクトル  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_D$  を横に並べて

構成される  $D$  次元の正方行列であり、また、 $\mathbf{\Lambda}$  は固有値  $\lambda_1, \dots, \lambda_D$  で対角化された  $D$  次元の対角行列である。上記の式の両辺に対し、 $\mathbf{U} \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}^T = \mathbf{M}$  の左側から  $\mathbf{U}^T$  を、右側から  $\mathbf{U}$  を掛けると、

$$\mathbf{U}^T \mathbf{M} \mathbf{U} = \mathbf{U}^T \mathbf{U} \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}^T \mathbf{U} = \mathbf{\Lambda}$$

の関係式が得られる。また、式 ( 2.45 ), ( 2.46 ), ( 2.47 ) より、

$$\mathbf{U}^T \mathbf{\Sigma} \mathbf{U} = \mathbf{U}^T \mathbf{\Lambda} \mathbf{U} = \mathbf{\Lambda}$$

の関係式が得られる。

式 ( 2.45 ) より、

$$\mathbf{\Sigma} \sum_{i=1}^D \mathbf{u}_i = \sum_{i=1}^D \lambda_i \mathbf{u}_i$$

とすると、上記の式の行列形式は、

$$\mathbf{\Sigma} \mathbf{U} = \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}$$

と書くことができる。この式の両辺に対して、左側から  $\mathbf{U}^T$  を掛けると、

$$\mathbf{U}^T \mathbf{\Sigma} \mathbf{U} = \mathbf{U}^T \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}$$

と書き直せる。ここで、 $\mathbf{U}$  は固有ベクトル  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_D$  を横に並べて構成される  $D$  次元の正方行列であるので、上記の式の右辺は、

$$\begin{aligned} \mathbf{U}^T \mathbf{\Lambda} \mathbf{U} &= [\mathbf{u}_1 \quad \dots \quad \mathbf{u}_D]^T \begin{bmatrix} \lambda_1 & \dots & 0 \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & \dots & \lambda_D \end{bmatrix} [\mathbf{u}_1 \quad \dots \quad \mathbf{u}_D] \\ &= [\mathbf{u}_1 \quad \dots \quad \mathbf{u}_D]^T \begin{bmatrix} \lambda_1 & \dots & 0 \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & \dots & \lambda_D \end{bmatrix} \begin{bmatrix} u_{11} & \dots & u_{D1} \\ \vdots & & \vdots \\ u_{1D} & \dots & u_{DD} \end{bmatrix} \\ &= [\mathbf{u}_1 \quad \dots \quad \mathbf{u}_D]^T \begin{bmatrix} \lambda_1 u_{11} & \dots & \lambda_1 u_{D1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \lambda_D u_{1D} & \dots & \lambda_D u_{DD} \end{bmatrix} \\ &= \begin{bmatrix} u_{11} & \dots & u_{D1} \\ \vdots & & \vdots \\ u_{1D} & \dots & u_{DD} \end{bmatrix}^T \begin{bmatrix} \lambda_1 u_{11} & \dots & \lambda_1 u_{D1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \lambda_D u_{1D} & \dots & \lambda_D u_{DD} \end{bmatrix} \\ &= \begin{bmatrix} u_{11} & \dots & u_{1D} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ u_{D1} & \dots & u_{DD} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \lambda_1 u_{11} & \dots & \lambda_1 u_{D1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \lambda_D u_{1D} & \dots & \lambda_D u_{DD} \end{bmatrix} \\ &= \begin{bmatrix} \lambda_1 u_{11} u_{11} & \dots & \lambda_1 u_{D1} u_{1D} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \lambda_D u_{1D} u_{D1} & \dots & \lambda_D u_{DD} u_{DD} \end{bmatrix} \end{aligned}$$

と整理でき、式 ( 2.46 ), ( 2.47 ) で与えられる固有ベクトルの正規直交性より、

$$= \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 & \dots & 0 \\ 0 & \ddots & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & \dots & 0 & \lambda_D \end{bmatrix} = \mathbf{\Lambda}$$

となる。

上記の 2 つの式から、 $\mathbf{M} = \mathbf{\Sigma}$  であることがわかり、式 ( 2.48 ) が成立することがわかる。

よって、式 ( 2.45 ) が成立する実対称行列  $\mathbf{\Sigma}$  は、固有値を係数とする固有ベクトルで展開

した、式 ( 2.48 ) の形で書けることを示せた。

同様に、逆行列  $\Sigma^{-1}$  は、式 ( 2.49 ) の形で表現できることを示す。これは、式 ※ より、 $\Sigma^{-1}$  は、

$$\Sigma^{-1} = (\mathbf{U} \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}^T)^{-1}$$

と書き表せ、逆行列の基本的性質から、

$$(\mathbf{U} \mathbf{\Lambda} \mathbf{U}^T)^{-1} = (\mathbf{U}^T)^{-1} \mathbf{\Lambda}^{-1} \mathbf{U}^{-1}$$

が成り立ち、 $\mathbf{U}$  が正規直交であることから、 $\mathbf{U}^{-1} = \mathbf{U}^T$  が成り立ち、また、 $(\mathbf{U}^T)^{-1} = (\mathbf{U}^{-1})^{-1} = \mathbf{U}$  であることから、

$$(\mathbf{U}^T)^{-1} \mathbf{\Lambda}^{-1} \mathbf{U}^{-1} = \mathbf{U} \mathbf{\Lambda}^{-1} \mathbf{U}^T$$

と整理できる。ここで、 $\mathbf{U}$  は、固有ベクトル  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_D$  を横に並べて構成される  $D$  次元の正方行列であり、また、 $\mathbf{\Lambda}$  は固有値  $\lambda_1, \dots, \lambda_D$  で対角化された  $D$  次元の対角行列であったので、 $\mathbf{\Lambda}^{-1}$  は、

$$\mathbf{\Lambda}^{-1} = \begin{bmatrix} \frac{1}{\lambda_1} & 0 & \dots & 0 \\ 0 & \frac{1}{\lambda_2} & & \vdots \\ & & \ddots & 0 \\ \vdots & \ddots & & \frac{1}{\lambda_D} \\ 0 & \dots & 0 & \frac{1}{\lambda_D} \end{bmatrix}$$

と書き表すことができ、 $\mathbf{U} \mathbf{\Lambda}^{-1} \mathbf{U}^T$  は、

$$\mathbf{U} \mathbf{\Lambda}^{-1} \mathbf{U}^T = \sum_{i=1}^D \frac{1}{\lambda_i} \mathbf{u}_i \mathbf{u}_i^T$$

と書き直せる。よって、逆行列  $\Sigma^{-1}$  は、式 ( 2.49 ) の形で表現できることを示せた。

#### 【 逆行列の基本的性質 】

○  $\mathbf{A} \mathbf{A}^{-1} = \mathbf{A}^{-1} \mathbf{A} = \mathbf{I}$

○  $(\mathbf{A} \mathbf{B} \mathbf{C})^{-1} = \mathbf{C}^{-1} \mathbf{B}^{-1} \mathbf{A}^{-1}$

⇒ これは、任意の数の逆行列について成り立つ。

○  $(\mathbf{A}^T)^{-1} = (\mathbf{A}^{-1})^T$

(  $\mathbf{A}, \mathbf{B}, \mathbf{C} : N \times N$  正方行列 )